

---

# **悲劇。天使の場合と悪魔の場合。**

Laria

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悲劇。天使の場合と悪魔の場合。

### 【Zコード】

N4018M

### 【作者名】

Larria

### 【あらすじ】

悪魔がやつてきた。

まるで気違ひの戯言だと思われるだろうが、事実である。

ただ一つ、僕にもわからないのはそれが悪魔ではなく天使かもしれないという事だ。

## 第一話（前書き）

初投稿です。

ジャンルは何になるかわからなかつたのでその他にしてあります。  
辛口でも感想などいただけると嬉しいです。

## 第一話

### 悪魔リエルの場合

季節は夏。蝉の音が街にわんわんと響き渡り、青と白の空を引き立たせる。

「暑い……。体が溶けそうだ……。」

彼はリビングのクーラーを二十六度に設定してオレンジ味のアイスキャンディを舐めながら、縦一列に並べた座布団の上に気だるく寝転んでいた。

特に何一つ見るつもりもないが、電源だけはついているテレビから流れるニュースでは、連日の猛暑による熱中症の被害状況を語っていた。そんなニュースが耳に入ると余計に暑くなる。

そう思つた彼は寝そべつたままテレビの電源を消して、食べ終えたアイスの棒をゴミ箱へと放つた。宙を舞つたその棒はうまくゴミ箱へと入る。

彼は気をよくして一眠りしようかと目を閉じた。

その時、インター ホンの音が部屋に鳴り響いた。

「この暑いのに……。一体誰だ。」

彼は重い体をゆっくりと立ち上げた。急いで玄関に向かい扉を開く。

「はい。」

彼は不思議な光景を目にした。

玄関の軒下に立つていたのはただ一人の小さな女の子だった。

叩けば壊れてしまいそうな程小さな体。太陽の光に負けじと輝く腰までの長い黒髪。夜よりも暗く海よりも深く、意識が引き込まれるような黒い瞳。その瞳に似通つた闇を携えた真つ黒なゴシックロリータのドレス。玄関には全てを我が物とし携えた女の子が立つていた。

彼女は少し不安そうな顔で口を開いた。

「あの……富内 修治さんですよね？」

彼は少女を知らなかつた。が、少女は彼の名前を知つていた。それでも彼には全く心当たりがない。

修治は不審がりながら彼女の問いに頷いた。すると少女の顔は安堵の笑みに変わつた。彼女はぺこりと頭を下げて言った。

「改めましてこんにちは。貴方に悲劇をお届けにきました。」

悲劇を届けに来た。

少女の言葉は修治の思考回路を全く理解の出来ない領域へと引きずり込んだ。まさに日常から戦場へ引き込まれたような不可解さだつた。何しろ修治は、今までに見ず知らずの少女が突然家を訪れて悲劇を届けに来たという状況を想像した事もなかつたからだ。

「……え？」

彼は裏返つた声で言つた。もちろん少女が何故修治の名前を知っているのかとか、少女が一体誰なのかとか、聞きたい事は考えればいくらでも出てくるのだが、修治の頭の中は質問を考えられるような状況ではなかつた。

そんな彼に構わぬ少女は笑顔で言つた。

「ですから、貴方に、悲劇をお届けに来たんですよ！」

もちろん、彼女が何度もそれを言い直すとも修治がそれを理解する事は出来ないのであつた。結局このやり取りでわかつた事は何一つないのだが、さしあたつて修治は彼女を家に上げることにした。

修治の本心としては少女を追い返しておきたかったが、こんな真っ黒な服で真夏の昼間に外を歩いたら熱中症で倒れてしまうだろう。しかし少女を家に上げる時に見た彼女の額には、一零の汗も見られなかつた。修治はそれに気付いたが、そして気にする事もなかつた。修治は彼女をリビングのソファに座らせた。昔から人気のあるジース、カルフイスを冷蔵庫取り出して牛乳で割ると、それを少女に差し出した。

「な、何ですか？この白いの……。」

有名なジュースであるそれを知らないはずがないと修治は思つた

が、指で触つてみたり匂いを嗅いでみたりと、彼女の仕種は本当に何も知らない様子だつた。

「いいから飲んでみなよ」

修治が勧めると彼女はゆっくりと冷えたコップに手を添えて口に運んだ。

「んくっ……何だか喉に引っ掛かつて飲みにくいです……あ、でも凄くおいしいです！」

カルフイス一口で一喜一憂する彼女の表情はとても豊かで、見ていて飽きる事はなかつた。

それどころか次はどんな表情をしてくれるのか、修治は楽しみで仕方なかつた。

だが修治が彼女を家に上げた目的はこれではない。修治は彼女の表情ばかり見ている場合じやないと思い本題に入った。

「悲劇つて一体どういうこと？君は一体何処から来たの？名前はなんていうの？」

彼女は人の話を聞く時にはちゃんと目を見る、（あくまでも推測ではあるが）その幼い年齢の割によく出来た子だ。修治の質問をしつかりと聞くともう一口カルピスを口に含み、苦しそうに飲み込むと幸せそうな表情を見せてから答えた。

「悲劇は悲劇です。貴方の身に悲劇が降りかかるんです。そして私はその悲劇が起きるのをサポートするために魔界から派遣された新人悪魔のリエルと申します。以後お見知りおきを！」

元気に挨拶をしてぺこりと頭を下げる少女　リエルと名乗つたその少女。だが修治には先程の玄関での問答同様、一切理解出来る様子がなかつた。

悪魔というと、一般的には天使と対極の立場にある山羊の頭に人間の体をした禍々しい存在ではなかつたのか……修治はそう思つたがそんな宗教的なことはどうでもいいのだ。

確實なのは今ここに悪魔を名乗る少女が存在するということだ。

そもそもエルと名乗るこの少女が悪魔である事すら怪しい。悪

魔の存在なんて全く非現実的である。大方、このくらいの子のたちの間で流行つてゐる悪戯なのである。

言葉遣いがやけに大人びていて、ただの悪戯とは思えない。とはいへ、悪魔だの悲劇だの魔界だの、修治にはそんな物が到底信じられるわけがなかつた。

「……悪魔？」

くだらないものだと思つた修治は少し不機嫌そうに聞いた。しかしリエルは顔色一つ変えずに笑顔で答えた。

「はい、悲劇によつて幕を閉じられた方は一度魔界へ来ていただいて、心のバランスから天使になるか悪魔になるか、再び人間になるかの判断が降されるんです。とはいへ、悪い人だから悪魔になる、という物ではありませんよ。判断力や適応力、さまざまな能力を考慮して選ばれるんです。」

先程から何度も感じてゐる感覚ではあるが、全く意味がわからなかつた。またも早々にリエルを帰したい衝動に駆られてしまう。修治は外が涼しくなる夕刻までリエルに話を合わせて時間を稼ぐことにした。

それから数時間。魔界とやらの話も散々聞いた。

リエルが言うには、人間の言う「地獄」という物は存在しないが魔界はそれに近い存在であるらしい。悪い人間がいく所ではないがそこに巢食う者が人間に危害を加えるのは事実ということだ。

また、そこでは人間の住む世界と同じように社会が構成されているらしい。人間に悲劇を与え、魔界に連れて行く事は人間界で言う狩りや漁に相当するらしい。

取つて食われるという訳ではなかつたが、修治は狩りの対象とされそれを目の前で告げられた事に複雑な心境を持つた。

修治がため息まじりに外を見ると、空は綺麗な夕焼けに染まつている。暑さも大分和らいだ。

修治はやつとりエルを家に帰せると思い、立ち上がつた。

「さあ、リエルちゃん。色々聞かせてくれてありがとう。でも今日

はもう田も暮れできたし、おひかに帰らひへ。」

「あつ……。」

修治はリエルの手を引いて玄関に向かつた。

玄関に立ち、履きやすいように彼女の靴を整えてやつた。

「リエルちゃん、一人でおうちまで帰れるよね？」

修治がそういうと、リエルは無言で靴を履いた。

そしてあれほど明るくて見ているだけで楽しかった表情が一変して暗く退屈な表情になつた。

「おうちは……ないんです……。」

修治はさすがにこんな不思議な子でも家がないのはありえないだろうと思ひ、リエルの言葉を聞き入れずに暗くなる前に早く帰るよう促した。

修治が動こうとしないリエルの頭を撫で、少し背中を押してやると彼女は俯いて扉の外へ歩みを進めた。

「じゃあね、リエルちゃん。」

修治は扉から外へ一步出たリエルの背中に別れを告げた。

リエルは修治を振り向き、悲しそうな顔で小さく会釈をするとそのまま無言で何処かへと去つていつた。その悲しそうな顔を見た修治は少し罪悪感に駆られたが、彼女の世界から解放された事に安堵していた。

それから修治は、何事もなかつたかのように夕飯を食べて風呂に入る。

テレビを見たりお気に入りのウェブサイトを回つたりと時間を潰し、夜が更けるとパジャマを着てベッドに入る。

そのとき、先程まで全く吹いていなかつた風がガタガタと窓を揺すつた。

「そういえば、今日辺り台風直撃だっけ……。」

修治の耳に遠雷が届く。そして、ぱたぱたと窓を打つ雨音が聞こえてくる。雨が激しくなりになると眠れなくなる。やうなる前に修治は早々に寝ることにした。

時刻は夜3時。修治は大雨の音に起こされた。

窓がガタガタと音を立てる。雨が窓にぶつかる音が非常にうるさい。

修治がもう一度寝ようと目を閉じると外から何か大きな音が聞こえて来た。太い木の枝がへし折れたような音。

修治は少し気になつて様子を見に行くことにした。が、この雨では外に出る氣にもならなかつたのでベランダの窓から外を見た。驚く事に、雨樋が折れて屋根からぶら下がつている。

「あちゃー……まさか雨樋が折れるとは……。どれだけ老朽化してるんだ、このアパートは。」

そして修治は何気なく下を見て驚いた。アパートの庭、堀の真横に先程の少女リエルが倒れていた。

まさかこの雨の中俺の事を待つて……まさかそんな安い小説みたいなありがちな展開……じゃない、早く助けなければと、修治はパジャマのまま靴を履き外へ駆け出した。

雨に濡れるのを顧みずリエルの元にたどり着く。彼女の体は冷たく冷え切っていた。

「ずっとここに……？まさか死んじゃいないよな……。よつと。」

修治はリエルを抱き上げて早々に家の中に戻つていった。

雨に流れて見えなかつたのだろうか、家の中に入ると彼女のこめかみから血が滲んだ。雨に打たれて力尽き倒れた時に堀にでもぶつけたのかもしれない。

修治は彼女を布団の上に寝かせ、バスタオルで体を少し拭いてやつた。そして毛布をかけ、傷の手当をするために救急箱を取りに行つた。洗面所の棚から箱を取り出して彼女の下に戻る。

救急箱から取り出したガーゼと消毒薬でリエルの傷口を処置していると、消毒の痛みに気付いたのか少し顔をしかめてからリエルが目を開いた。

「あ、目覚めたんだね。外で倒れてたんだけど……大丈夫かな？」

リエルは虚ろな表情で修治を見つめた。それからすぐに驚いた表

情に変わり言った。

「わ、私……気を失つて……？」

そして間もなく先程の傷口が痛んだのか、患部を手で押さえて静かになる。

「ああ、そこは外で怪我しちゃったみたいなんだ。頭だし一応安静にした方がいいかもしない。」

「『めんなさい』『迷惑かけてしまって……』。それに、昼間も訳のわからない事を言つて押しかけてしまって……私、悪魔としての仕事が初めてで、修治さんに対してもどう接していいかもわからなくて……。」

修治に迷惑をかけたと泣きそつな声で話すリエル。そんな彼女をこれ以上否定する気が修治には起きなかつた。

「…………リエルちゃん。」

修治に呼ばれ顔を上げたリエル。修治はリエルの目を見る。リエルの瞳は悪魔とは思えない程に澄み渡つている。だがそれは彼女の言葉を信じたくなるような瞳でもあつた。

「リエルちゃんは、俺の所に悲劇を届けに来たんだよね。」

悪魔の存在は肯定できない。だがそのまま彼女を頭ごなしに否定するのは絶対に出来ない。修治はリエルを少しだけ、信じてみることにした。

「…………じゃあ、おかえり。リエルちゃん。」

「え……？た、ただいまです！」

修治に受け入れられて天使のような笑みを浮かべるリエル。もう彼女の表情には一片の曇りも見られなかつた。

こうして、修治と悪魔の新しい日々が始まつた。

「疲れたら？何か飲むかい？

「…………カルフイス！」

## 第一話

リエルはさすが悪魔と言つたところか、次の日にはもう何事もなかつたかのようにピシッピンしていた。

修治はスーパーに夕飯の買い物に行つたついでにリエルのためのカルフイスを買うことにした。

修治の住むアパートから徒歩四分。『スーパーかまやつ』は今日も繁盛している。辺りに敵対するようなスーパーがないため、この近所に住む人々は揃つてかまやつに訪れる。飲み物コーナーには様々な商品が用意されている。近所の学生の一ーグに応えたものであらうか、紅茶にジュース、コーヒーなど有名な商品からマニアックな商品まで取り揃えてある。だが、肝心のカルフイスはといふと…。

「あ、あれ？」

カルフイスの棚は綺麗に空にされていた。まさかの売切れという状況だ。

「仕方ないか……。」

修治はカルフイスの代わりに隣の棚にある桃のカルフイスとトマトカルフイス、そして夕飯のおかずにするための白菜や豚肉を籠に入れてレジを通した。

その帰り道、近所で一番車通りの多いこの通りで、沈みかける夕日を背にして修治は色々と考え事をしていた。

「リエルちゃんは服とかどうするんだろう？他に荷物もないようだつたし。夏だし汗もかくもんなあ……。あ！病気とか怪我とか、何かあつたら保険証とかどうするんだろ？まさか十割負担……？」

様々な思考を重ねながら横断歩道を渡る。しかし修治は重大なことに気付いていなかつた。

横断歩道、歩行者用信号は赤、そして迫り来るトラック。その上運転手は居眠りして修治に気付いていない。

修治が迫り来るトラックの存在に気付いた時には彼とトラックの距離は3mもなかつた。当然、逃げる事すら出来ない。修治は恐怖に駆られ、目を閉じた。

「ああ、このスピードで突っ込まれたら間違いなく死ぬな。これがリエルちゃんの言つていた悲劇なんだろうな。」

田舎のお父様、お母様、先立つ不幸をお許しください。

人は死ぬ間際、走馬灯のように記憶を顧みると言つ。修治の頭にもよぎる。幼い頃の記憶、初恋の記憶、高校生活の記憶、それから、それから……。

どんなに記憶を顧みても一向にトラックは突っ込んで来る気配がなかつた。修治は既に三度程記憶を顧みている気がした。修治は不思議に思つて目を開いてみた。

田の前にはやはりトラックがある。修治は驚いて尻餅をついた。しかしトラックは微動だにもしない。正確に言えば、動かないのはトラックだけではなかつた。通行人もみんなその場で立ち止まつている。空を見上げると鳥までもが止まつっていた。

「な、何だ……？」

自分はいつも通り動く事が出来る。まるで写真の中にでも取り込まれてしまつたような、異次元のようなこの世界にある違和感に修治は完全に思考が停止してしまつた。

「よかつた、間に合いましたね。」

修治が向かおうとしていた先、横断歩道を渡りきつた歩道からの声。修治は声のした方を向く。

「リエルちゃん……？」

「助けに来ましたよ、修治さん。ちゃんと前くらいい見ないと死んじやいますよ？」

漆黒のドレスに身を包んだ悪魔が、修治に悲劇を運んで来たはずの悪魔が修治を助けた、らしい。

「さあ、私の魔力ではそう長く時間は止められません。早く渡つて

ください。」

「あ、うん。」

危険から解放された（のかは定かではないが）、さしあたって横断歩道を渡り切った修治だが、何が起きているのかは全くわからなかつた。修治はリエルに一体何をしたのか聞くことにした。

だが修治が口を開こうとしたのとほぼ同刻、トラックはいきなり猛スピードになり通過、一百メートルほど先の電柱に激突して大破した。

「ああっ！ リ、リエルちゃん！ あれはどうするの…？」

「いいんですよ、あれは私の管轄外ですから。」

相変わらずの天使のような笑みを浮かべるリエル。今回ばかりはあまりに悪魔らしい。管轄外とかそういう問題じやないだろ？ ……と修治は少し運転手を氣の毒に思つた。

トラックの方を見ると、どうやら通行人が迅速な対応で救急車と警察を呼んでいるらしい。幸い、ここは消防署の付近故に、救急車はすぐに到着するだろ？ 修治は気持ちを切り替えて、リエルに聞き直す。

「リエルちゃん、さつきは何をしたの？ 僕以外がみんな動かなかつたけど……。」

「悪魔ですか。魔法ですよ、魔法。」

リエルは当たり前のようになに言ひ放つ。

「ま、魔法ってそんな……漫画じゃあるまいし。それに俺だけ動いたりなんて、都合がよすぎない？」

「魔法ですから、都合のいいものですよ？ ほら、小説とか読んでみてもみんな都合いいでしょ？」

やはりリエルに何かを聞くと、全く意味のわからない返答が返ってくる。そして余計に混乱する。修治もそれは悪魔やら魔界やらの話の時に痛感したはずだったのだが。

「ううん……。まあいや、考へてもわからないし。それよりも、どうして俺を助けてくれたんだい？」

そう、これが一番の疑問だった。こればかりはわからないと心に引っかかるものがある。

「それはですね、あそこは死ぬ場面ではなかつたという事です。」

「あ、つまり近々死ぬべき場面が来る、と……。」

修治は凄く悲しそうな顔をした。まさか死に直面して、悲しい顔だけで済ませるとは自分でも思つてもいなかつた。だがしかし泣いてどうにかなるわけでもなく、足搔く手段も思いつかない、一種の諦観が修治を取り巻いていた。それを見て、リエルも悲しそうな顔で修治を見つめた。修治は彼女の目から一切の悪意を感じられず、少しだけ、リエルなら本気で殺しにかかりたりはしないんじやないかな、なんて思つていた。

「……よし、帰ろうか。カルフイス飲むかい？」

「うんっ！」

あどけないリエルの笑顔。一人っ子であつた修治にとつては妹が出来たようで何だか嬉しかつた。

「はい、桃のカルフイスとトマトカルフイス、どっちがいい？」

次の瞬間、リエルの顔が急に暗くなつてしまつた。

「カルフイスは……ノーマルがよかつたです……。」

「あ、ご、ごめん！普通の奴売り切れてたんだ！」

そう言うもリエルは少し涙目になつてている。口らえるように歯を食いしばり、潤んだ目を左腕で拭う彼女の姿は一介の悪魔とは思えない物だつた。

だがそれから十分後、桃のカルピスを飲んで幸せそうに微笑んでいるリエルの姿があつた。

## 第三話

半年の月日が流れて季節は冬になつた。あれからリエルのいう悲劇とやらは一向に来る気配がなかつた。

この半年の間、リエルが人間界の色々な物を見たいと言つから一人で海に行つたり、花火をしたり、紅葉を見たりして日々を満喫していた。

リエルは悪魔であり、見た目は小学生くらいだが、様々な事を一人で経験していくうちに修治は確実に彼女の笑顔に惹かれていた。ロリータ・コンプレックスの氣はなかつたが、それだけ彼女の純粹さは魅力であつた。

今日は一人でこたつに入つていて、ミカンを剥きながら修治はずっと氣になつていていた事をリエルに尋ねた。

「なあ、悲劇つていつ来るんだ？もう半年は経つと思うけど……。修治が剥いたミカンをリエルが小さな手で奪い取りひょいと一房口に放り込む。こくりと飲み込み口を開いた。

「そのうち来ますよ。ただ……」

「ただ？」

「その……もうちょっとだけ……一緒にいたいかなって……。」

リエルは真っ赤な顔でそう言つと、すぐにこたつの中に潜つてしまつた。修治は彼女の言葉の余韻に浸つっていた。

「ゴソソッ。

こたつの中から響いた鈍い音。

それに次いでリエルのくぐもつた声も響いた。

「痛い……。」

今日はよく冷える日だ。修治は石油ストーブの燃料を換えている。

リエルは何かの気配を察知している。

「……これは？」

「ん？ リエルちゃん、どうしたの？」

「あ、いえ。何でも……ありません。」

その時、部屋にインターфонの音が鳴り響いた。

「誰だこの寒いのに……。はーい。」

修治が扉を開くと、そこに立っていたのは一人の小さな女の子だった。

「あれ？ リエルちゃん……違う……？ 君は一体誰？」

そう、見た目はリエルと大差なかつた。多少背と顔が違うくらいだ。ただ違うのは、その目から放たれる気迫と言ひのだろうか、とてもじやないがリエルとは比べ物にならないくらいに萎縮させられてしまう鋭い目だ。

「リエル……いるのだろう。出せ。」

その子の口から放たれたのはリエルとは正反対の凜とした声。心から凍りづけになるような声。

「あ、ああ……リエルちゃん！ お密さんだよ！」

修治がリエルを呼ぶと彼女はこたつから出てぱたぱたと駆けて來た。

「はーい……あ、貴方は……！」

リエルは玄関に立つ少女を見ると怯えて修治の影に隠れた。

リエルの知り合いであるといつゝことで修治は彼女を部屋にあげて話を聞くことにした。

「君、名前は？」

「私はレイリアだ。」

レイリアと名乗った少女は驚くほど無愛想である。無愛想であることで威圧感が増している。

「レイリアちゃん……。何か飲む？ カルフイスとか……。」

「気安くちゃんと等つけるな下等生物が！」

まさに悪魔とでもいいくべき存在だ。修治は言い知れぬ不安に駆られた。

「さて、本題に入る。この男、修治の悲劇執行期間は既に半年が過ぎた。リエル、これは重大な命令違反だぞ。」

レイリアの厳しい口調にただ黙つて俯くリエル。もしやここで「悲劇」が執行されるのだろうか。修治は心臓に驚づかみにされたような痛みを感じる。完全に恐怖に漬けられていた。

「そこで魔界から命令が下つた。リエルよ、選択しろ。」

リエルはぐくりと唾を飲み込むと真剣な表情で聞き入った。

レイリアは冷たい言葉で修治の耳を刺した。  
「今すぐこの男を悲劇に遭わせるか、魔界で罰を受けるか、だ。選べ。」

リエルは黙つてしまつた。修治が彼女の立場でもきっとやうするだろう。修治はまだ離れたくないと心の底から思つていた。リエルもきっとそう思つてくれていると信じている。

だがレイリアはそんな事など一切汲もうとはしない。

「リエルよ、答えぬか。ならば私がこの人間を殺す。お前は罰を受ける。」

レイリアのこの言葉にも黙つたままのリエル。だが、言葉には出さずとも彼女なりの勇気を振り絞つた。小さな体で修治の前に立ちはだかった。その小さな体は小刻みに震えていた。これがリエルの選択だった。

修治もリエルも何も言葉が出なかつた。レイリアが修治に向けて一步踏み出す。

「邪魔だ。リエル。」

そう言つてレイリアが手を振りかざすとリエルの体が宙を舞い、ボロ人形のように壁に打ち付けられて動かなくなつた。修治は急いでリエルの下に駆けつける。目立つた外傷は見当たらないが、気を失つてしまつたようだ。

レイリアを見ると、彼女の右手付近の空間が歪み大きな鎌が現れ

た。

レイリアはその鎌を取り、修治に向かつて振りかぶった。

あ、死ぬな。

「さあ人間よ。担当悪魔からの悲劇が下されない場合私達処刑悪魔からの死を受け入れるのが捷……。死ぬがよい。」

レイリアは振りかぶった鎌を振り下ろす。

またも修治の記憶が走馬灯のように巡る。

この感覚は前にも味わつた事がある。そう、過去にトライックが突っ込んできたあの時と同じ感覚だ。

もう少しだけ……少しだけでいいからリエルちゃんと一緒にいたかった……。もつと話がしたかった。もつとあの笑顔が見たかった。

修治は今となつては彼女の事を信じてるが、始めはちゃんと向き合つていなかつた事を謝りたかった。

それに何より、修治は彼女の事が好きだつたが、その事を一言も伝えていなかつた。今となつてはそれを伝える術もない。

もう時は戻らない。涙も流れない。

目の前に立ちはだかる死を受け入れるしかない。

だがその時、動かなくなつていたはずのリエルが修治の前に立つた。レイリアの鎌は一向に下ろされない。

「また……時間止めちゃいました……。」

リエルがまた時間を止めた事で、またも死の瞬間を免れた。だが修治にはリエルの考えが全くわからなかつた。

これから逃げるわけにもいかないだろう。ましてや戦う事も出来ない。絶対的窮地には変わりない。

ただ、わかつたのはそこに彼女がいるという幸せだけだった。

そして動かない時の中、リエルが口を開いた。

「私……迷惑かもしないですが……。」

その時だつた。レイリアの鎌が……いや、時が再び動き始めたのだ。そしてレイリアの鎌はぐんと加速して……。

鎌はリエルの体を肩から腰にかけて袈裟掛けに分断した。

リエルの上半身はぼととり机の横に転がった。そして下半身は力を失いその場に倒れた。

「ふん……リエルのような新人の魔力を私の魔力で抑えられないとも思ったか……。愚かな。」

数秒の間を置いて修治の下半身からも力が抜け、その場にへたれ込んでしまう。だが修治は精一杯の力を振り絞り、リエルの下半身の下へと這い寄った。

そして彼女の上半身を抱き上げて、泣いた。

そうしていると俺の泣き声の他に、もう一つ虫の鳴くような声が聞こえた。

リエルだった。この斬撃で即死しないのは彼女が悪魔だからだろうか。

「わ……たし……」

「リエルちゃん……しゃべっちゃ駄目だ……。」

彼女がもう助からない事はわかっていた。だが修治は少しでも彼女の「生」を感じていたかった。

「迷惑かも……されませんが……ずっと……好きでした……。」

ただ、ただ嬉しかった。こんな形にはなつてしまつたが、彼女の想いを知る事が出来て凄く幸せだった。嬉しさの余り、また涙が込み上げて嗚咽して、何も言えなかつた。

そして、そのままふと闇に溶けるようにリエルは……消えた。彼女の下半身があつた場所には一匹のゴキブリがいた。普段なら気持ち悪いと思うはずなのに、何故か愛しささえ感じられた。そのゴキブリが懐かしい天使のような悪魔の微笑みをしているように感じた。

くしゃり。

小さな音を立ててゴキブリはレイリアに踏みにじられた。

「人間よ。死よりも悲劇に値するようだな……。クク……あははははははは！人間よ！悲劇に身を浸し絶望にまみれ……己の死を待てる！」

「そう言つとレイリアは一瞬の内にカーテンを纏つごとく闇に消えた。

訪れた静寂。孤独。そして悲劇。

凄く不思議な出会いをして、恋をした。

凄く悲しい別れをして、泣いた。

リエルを守れなかつた事が悔しかつた。

リエルが死んでしまつて悲しかつた。

ただ、何よりも悔しかつたのは……

「結局……結局俺は俺の気持ちも伝えてなかつたし……何の言葉もかけてやれなかつた……。」

悲劇はまだこれから起ころのかも知れない。

そしてリエルがいなくなつてから半年が経つた。そつ、ちょうど出会つてから一年前後である。

修治が2年間勤めていたコンビニのバイトもずっと無断欠勤している。一切の連絡を断つているのでもつとつくにクビになつているだろう。

ただただ、何もする気が起きなかつた。

ただ朝日が覚めて、いつもリエルが寝る時に抱いていたふかふかのタオルを抱いてぼーっとして、空腹を感じたら何かを食べて、暗くなつたら眠りについて。

何もしない生活故に親からの仕送りで十分に生活出来た。パソコンも携帯もテレビもエアコンもいらない。まさに本当の廃人だった。

そしてあの日以来カルピスが減る事はなかった。

## 悪魔レイリアの場合

「…………レイリア…………。」

「己の名を呼ぶ声に、彼女は目を覚ました。目を開けようとするが、さんさんと降り注ぐ陽の光にそれを阻まれた。どうやら暇潰しに縁側で日光浴をしているうちに寝てしまつたらしい。

「ん……雄二か……。何か用か?」

レイリアは氣だるく体を起こして大きな欠伸を一つ。

「うん、そんな所で寝ていたら風邪引くよ。それに今から洗濯物干すから、なんていうか邪魔だよ。」

レイリアが雄二と呼んだその男は彼女に微笑みかけながらも、そこから退くようにと手で払う仕草を取つた。

「う、うるさいなあ…………。」

レイリアもそれに反発することなく立ち上がり、部屋の中へと戻つていつた。

それはある夏の昼間だった。

悲劇を運ぶ悪魔レイリアはここに着任してからの5ヶ月間、門倉雄二に対する悲劇を独断で先延ばしにしていた。彼女自身この仕事には慣れていたため、自分のしている事の重大さを重々理解していた。それでも彼女は行動に移らない。いや、移せなかつた。

「後一ヶ月もない…………か…………。」

レイリアはリビングの椅子を窓際まで運び、洗濯物を干している雄二を見ながら呟いた。

「ん? どうしたの? 何が一ヶ月もないんだい?」

雄二が洗濯物を干す手を止めてレイリアに問いかけた。少し呟いただけなのにしつかり聞かれていたようだ。雄二の地獄耳は悪魔であるレイリアですら尊敬するくらいだった。

「いや…………なんでもない…………。洗濯物、干すの手伝つぞ。」

レイリアはすっと立ち上がり、サンダルを履いて縁側から庭へと降りた。

「どうしたの？レイリアが手伝ってくれるなんて珍しいじゃない。」

雄一は少しからかうような声でレイリアに微笑みかけた。

「う、うるさいなあ……。そういうなら私はもう家にいる。一人で頑張れ。」

そう言つてレイリアは再び部屋の中に入り、椅子に座つて雄一が洗濯物を干す姿を眺めていた。

その日の夜、外は真夏には珍しく涼しかつた。扇風機や団扇でも快適に過ごせるような気温に加え、心地よいそよ風が吹く。

「いい風だねえ。」

縁側に座り涼んでいる雄一は隣に座つているレイリアに語りかけた。

「そうだな……。」

レイリアは少し暗い口調で返した。口調は意識していたのかもしない。雄一に気を使って欲しかつたのかもしない。

「……元気ない？」

レイリアは少し後悔した。ただでさえ勘が鋭い雄一に対してもわざわざ気付かせるような話し方をしてしまうなんて。彼に話してもどうにもならないということはわかっているのに。

「そんな事ないぞ。」

一見気丈に振舞うレイリアだが、それが張りぼてである事は雄一にはわかつていた。だが彼女がそれを話そうとしない限り自分から深く掘り下げるつもりはない。次の彼の一言はそんな彼なりの、レイリアを元気付けるための手段だつた。

「レイリア、外も涼しいし花火でもしない？気分転換に、さ。」

「花火……か……人間の小さな火遊びか。くだらんな。」

レイリアはあまり乗り気ではなかつた。もちろん雄一にもそれは伝わつてゐたが、だからといって雄一はそれで退くつもりはなかつた。雄一は立ち上がりて玄関に向かつた。下駄箱の上に置いてある

手持ち花火のお徳用パックを手にして縁側へと戻り、封を開けてその一つをレイリアに差し出した。

「はい持つて。火つけるよ。」

レイリアがしぶしぶ持った花火の先にライターで火が点される。その火はじりじりと先端を焼き、やがて花火の先端から「う」と火を吹いた。

「ひやあっ！」

花火を地面に向けていたレイリアは咄嗟に花火を下に落としてしまった。

「あはは、レイリアびっくりしたの？」

雄一はそれを笑い、レイリアを茶化した。レイリアは顔を真っ赤にしてそれを否定した。

「す、するわけないだろ！思つたより火が弱かつたから魔力で火を強くしただけだ！」

「はいはい。そうですか～。」

「ぐつ……貴様あ……。」

レイリアは常日頃からどうしても雄一との口の言い合いには勝てなかつた。実際今もびっくりして花火を落としていたので、余り反論する気にもならなかつた。そんな調子でひとしきり花火で盛り上がつた一人は、片付けて部屋に戻る。もちろんレイリアは後片付けを面倒だと拒否し、片付けたのは雄一一人である。

吹き込んだ花火の煙の匂いが少しだけ残る部屋の中で、二人は乾いた喉を麦茶で潤していた。

「なんだかんだ言つてレイリアも楽しそうだったね。吹上花火では笑顔も見せてくれたし。」

嬉しそうに笑う雄一を見て、レイリアは心の底がむずがゆくなるような感覚に襲われた。

「な、笑顔など見せてはいない！あれが真顔だ！」

「そ、うなんだ。でもあの顔可愛かつたし似合つてたよ。」

もちろんいつも通りレイリアは否定する。だが雄一はそれに対し

冷静に返してくる。レイリアは次第に顔が真っ赤になってしまい、それを隠すように立ち上がり雄二に背中を向けた。

「う、うるさい……私はもう風呂に入つて寝るぞ！」

「遊び疲れたのかい？」

「ああ……いや！遊んで等いないわ！貴様には付き合いたれん！」

「あはは。」

全く調子が狂う。レイリアは吐き捨てて風呂場へと歩いていった。

レイリアは風呂に入りながらも考えていた。  
自分の使命について。

悪魔になつた時から彼女は悪魔としての才覚を開花させ、素質を十分に發揮していた。いわゆるエリートだつた。見習いを卒業し、ちゃんとした仕事を任せられるようになつてからもしつかりと迅速に仕事を熟して同僚や上司からの評価も高く、すぐに上流階級である処刑悪魔に昇格出来るだろうといわれていた。

しかしレイリアは、初めて仕事を終えたくないと思つてしまつた。悪魔と人間の間の実る事のない恋心、そして周りからの期待と圧し掛かる責任が、ついに彼女を壊した。

「あ……あれ……？何故だ？何故涙が……？くそ……悪魔になつてから涙なんて流した事はなかつたのに……。」

きっと汗だ。今日の風呂は少々お湯が熱いようだ。そう思いたくて彼女考える事を放棄しては湯舟に潜つた。  
けれど消えない目頭の熱い感覚。

熱い湯に潜つても消えない。冷たいシャワーを浴びても消えない。無理矢理にでも涙を止めるために彼女は自分の腕を思い切り噛み流血、心の痛みを身体の痛みで搔き消して風呂を出た。

その日の深夜。時計は既に三時を回つていた。

二人は寝室でぐつすりと……いや、レイリアは眠れなかつた。

ただ一つのベッドしかない部屋。

悪魔ではあるがレイリアは女の子であるし、レイリアが別々に寝ると言い張るためにレイリアは普段床に布団を敷いて寝ていた。雄二は自分が床で寝ると申し出たが、レイリアは無言でそれを棄却していた。

暗い部屋に月明かりが差し込む。レイリアは目を閉じず、ただただ時計を見つめていた。誰の目で見てもわかるように、無常にも時は流れ、別れの時は刻一刻と近づいていた。

時計を見つめるだけでも何度も泣きそうになつたことか、そして何度も腕を噛む事でそれを抑えたことか、レイリアの左腕は歯型の傷だらけになつていた。傷だらけのその左腕はもう痛みも感じなかつた。

「もう……抑えられない……。つく……ぐすつ……」

また涙が流れ出た。左腕が駄目なら、と右腕を噛む。それでも駄目だった。それだけ心の傷は深かつた。

レイリアは諦めて涙を流し切る事にした。頭から布団を被り、涙の溢れる目を枕に押し付けた。

「うう……ぐすつ……ひくつ……」

それでも涙は止まらなかつた。そのうち泣き疲れて眠れる、そして朝が来たらまたゆつくり考え方よう。そう思つて十数分泣いた時だつた。

「レイリア……？起きてるのかい？」

雄二の声がして、レイリアは驚いて体をすぐませた。彼女は布団を被つたままの姿で返した。

「……起こしてしまつたか。ぐす……すまない。もう寝るから。」

レイリアは枕に思い切り顔を押し付けて涙を拭つた。気付かれたくない。歯を食いしばつて漏れそうな嗚咽を噛み殺した。

「泣いてるのかい……？」

泣いてない、泣いてないから早く寝てくれ。レイリアはそう思つたが彼女の口から否定の言葉は出なかつた。いや、出せなかつたのだ。雄二の気遣うような言葉遣いが心の奥底に刺さるようで、余計に涙が溢れてしまう。

そのままレイリアが黙っていると彼女の軽い身体がふわりと持ち上げられ、ベッドの上にちよこんと座らせられた。

レイリアは月明かりに照らされる泣き顔を雄一に見られないよう下を向いて誤魔化そうとする。そんな彼女の身体は小刻みに震えていて、雄一にはいつもより少し小さく感じられた。

「レイリア……どうしたの？」

「何でも……な……ひっく……」

「レイリア。」

囁くような雄一の声がレイリアの耳に入る。その声はレイリアの心の中の何かを、大きな音立てで壊した。

「うくつ……。うつ……す……好きだ……。私は……お前の事が大好きなんだよ……。うああああつ……！」

レイリアは夜遅い事も忘れて大声で泣き叫ぶ。もうじうにでもなってしまえ。どうせ自分には何も出来やしないんだ。そんな考えだけが彼女の頭の中でぐるぐると回っていた。

泣きじゃくるレイリアの体を包み込むように、雄一の腕が回された。

「ありがとう。レイリア。俺も大好きだよ。」

回された腕の温かみなのか、それとも雄一の言葉が嬉しいのか、レイリアは心がドロドロに溶けていくような、心地よい感覚がした。「ずっと……ずっと一緒にいたいんだよお……。げほつ……うわああつ……」

「俺もずっと一緒にいたいわ。だからさ、ずっと一緒にいよう?」

レイリアは無言で頷く。だがそはいかない事はしつかりとわかつていた。それでも今この時だけは彼の言葉を否定する事はしなくなかった。

二人は暗闇の中で無意識のうちに唇を重ねていた。時間も忘れて互いの舌を貪った。

そして二人はその夜初めて、種族の壁を越え、一つになった。

## 第五話

朝が来た。時計の針は八時を指していた。一人は一睡もせずに寄り添っていた。ひとしきり愛し合つた後、ずっと二人でくだらない話に花を咲かせていた。

話に一区切りがついたところで、雄一の腹の虫がぐうと鳴いた。レイリアはくすくすと笑い、雄一は照れを隠すように咳払いをした。「そろそろ朝」はん食べようか。レイリアもお腹空いたでしょ。」「そうだな……。あ、一つ言つておくが。」

「ん? 何?」

レイリアは立ち上がり窓の外の青空を見て大きく体を伸ばした。そして一呼吸置いてから言った。

「昨夜の事……もしもの事があればちゃんと責任取るんだぞ?」

「え? もしもの事? ちょっと……どういう事! ?」

雄一は目をまん丸にして驚いた。うろたえるその姿を見てレイリアはくすりと笑う。

「冗談だよ……ふふ……お前との子供なら私も大歓迎だがな。さて、私はシャワーを浴びてくる。朝飯頼んだぞ。」

「俺もレイリアとの子供なら嬉しいな……。ゆっくり浴びといで。」

最後の言葉を笑顔のレイリアは背中で聞き風呂場に向かった。雄一はパジャマから部屋着に着替え、台所へと向かつた。

シャワーを浴びながらレイリアはまた考え込んでいた。

自分は一体これからどうしたらいいのか。出来る事なら本当に雄一とずっと一緒にいたかった。だが魔界がそれを許すはずがない。勝手な行動の結果、お互の身に予想される悲劇より重い悲劇が圧し掛かるかもしれない。どうしたらお互いがお互いの望む未来に進めるのか……。

レイリアは昨夜感じた彼の温もりを精一杯思い出して、決断した。

昨日までめそめそと泣いていた時の目とは違う、迷いのない目をして、シャワーを止めて洗面所に出る。身体を拭いて服を着る。そして彼女は服のポケットに収められたケースの中から、一つの青いカプセルを取り出した。

そのまま左手でそれを握り、レイリアはリビングへ歩んだ。

朝食はチャーハンだった。

レイリアは席に着くと先ほどのカプセルを机の下に放り投げ、足で踏み潰した。

「いただきます。ん……うまいな。」

いつもとは違う朝。自分の言いたい事が迷いなく口から出て行く。「どうしたレイリア？ いつもうまいなんて言ってくれなかつたのに。」

「うまいものは……うまいぞ……」

新鮮な気分で、むずがゆい気がした。レイリアは雄一が作ってくれたチャーハンを味わって食べた。少し塩味が強い気がするが、不思議と食が進む。

「ありがとう。でもちょっとしょっぱくないかな？」

そう言って笑う彼が、目の前にいるから。

朝食を終えるのはレイリアの方が後だつた。食べ終わつた食器をシンクに置き、リビングのソファに座つてゐる彼のもとへ。そしてレイリアの方から彼に唇を重ねた。

「レイリア、まだ食べたばかりだからチャーハンの味がするよ。」

そう言って笑う彼の顔を見てレイリアの心は更に安らいだ。

「馬鹿……。」

そう言って笑い、彼の隣に座り腕に抱き着いてこいつ言った。

「今日は……ずっとこうしてみたい……。」

レイリアの頭を撫でる大きな手。レイリアはその感触を忘れぬようこそっと目を閉じた。

彼女が朝食の前に捻り潰したカプセル。

その中には液化青酸が詰められていた。常温で氣化し、動物に対

し致死性の高い青酸ガスになる。

これがレイリアの選んだ道だった。

あれからどれだけの時間が経つただろう。レイリアは目を開く。辺りは真っ暗だった。これが死なのだろうか。人間から悪魔になる際、一度死んだレイリアだがその時の感覚など覚えていなかつた。

初めて見る闇。初めて感じる温度。

レイリアは怖かつた。

一人で幸せに死ぬつもりだつたのに、今は独り。

「何處だ……何處にいるんだ、雄一？私を独りにしないでくれ……。」

恐怖のあまりその場に座り込むレイリア。自分が座つている所が『何』かさえもわからず、余計に怖くなる。

その時、急に眼前に一人の少女が現れた。まだ周りは真っ暗闇だが、不思議とその姿だけははつきりと見えた。

「これは生前の……まだ人間だった頃の私……？」

その少女はゆっくりとレイリアに近づき、耳元で囁いた。

「くすくす……貴女馬鹿ね……。」

「な、何つー？」「

背筋が凍る程に耳を綺麗に震わせる声。レイリアはその少女を引き離そうと思ったが、腕も指も足も、全く身体が動かなかつた。

金縛りのような感覚。全身から流れる冷や汗。少女は言葉を続け、レイリアの発汗を促した。

「貴女、こんな事しちゃうべせに魔界では有望なの？恥ずかしくないのかなあ？」

「何の話だ！た、確かに今回はこいつ流れになつてしまつたが……私は今までの仕事は先輩よりも確實に熟した！何が悪いんだ！」

少女は深く溜息をつくとレイリアから数歩離れた。

「だから馬鹿なのよ。貴女は一つ大きな間違いを犯してゐる。それはね……。」

嫌だ。聞きたくない。レイリアはその言葉で自分の全てが否定される気がして怖かった。ただ一言『怖い』としか言いようがないくらいに怖かった。何にも例えられない、本当の恐怖。だが今の自分には耳を塞ぐ事すら出来ない。意識はあるのに、身体は動かないのに全身に無数の針を刺されるような感覚。既に自分がまだ汗をかいているのかすらわからない。

「貴女はね……。」

レイリアはそこで目が覚めた。窓の外は夕刻の紅い空。リビングのテレビの上に置かれたデジタル時計は、十六時を映している。

「夢……？ 何故私生きて……？」

レイリアが違和感を感じ隣を見ると、そこには青ざめた、雄一の姿があった。

「お、おい！ 田を覚ませ！ 私が生きてるんだ！ お前も生きてるだろ！？」

レイリアは雄一の体を揺さぶり、彼の反応を待つ。しかし彼が返事をする事はなかった。

「そんな……まさか……！」

レイリアは食卓へ駆け寄ると机の下に落ちたカプセルを見て愕然とした。

「まさか……そんなはずは……。」

レイリアが手にしたのは青いカプセル。実はその中身は塩素系ガスだった。塩素系ガスは洗剤同士を混ぜると発生する危険な気体として有名である。生身の人間が吸うと致死性はないが吸気量によつては呼吸困難で死亡する事は十分にあります。しかし元々は毒性の弱い気体であるため、人間とは体の造りが違うレイリアに対しても半日のみの昏睡程度の効果しか発揮しなかつたのである。

実際に液化青酸が溶けられているカプセルは『緑色』のカプセルだった。

「まさか……こんなちょっとしたミスを……？」

夢で見た間違いとはこの事だったのだろう。夢にまで出てくるだけあつて自分でも気付いていたのかもしれない。だがそれでもこの力プセルを潰したのは精神が正常でなかつたためか、それとも無意識の内の保身か、それを知る術はなかつた。

レイリアはこれ以上言葉を吐けなかつた。ただただ涙を流すだけで、些細なミスにも関わらず取り返す事の出来ない、何も出来ない自分が嫌で嫌で仕方なかつた。

その時だつた。

「レイ……リア……。」

レイリアは驚いて声のした方を振り向く。

先ほどは反応の無かつたの男の声。愛した男の声。もう一度だけ聞きたくて胸を痛めたあの声。

まだ彼は生きている。レイリアは涙を拭いて駆け寄つた。

レイリアは彼が息を吹き返していたのを確認してひどく安心した。だがこれで一件落着ではないといふのはわかっていた。

「ごめん……私のミスで……ぐすつ」

頬を伝う涙を、彼のまだ辛うじて温かい手が拭う。

「泣くなよ……。レイリア……謝る事なんか……。」

彼のその言葉でレイリアは心に決めた。もつこの人の前では泣かない。最後に一度、袖で目を擦り涙と決別した。

「私……いやだ……。私も連れていくてくれ……。」

彼の大きな手がふわりとレイリアの頭に被さる。

「レイリア……これも君の仕事なら仕方ないよ……。でも君は生きていってほしい……。君まで死ぬ事はないよ……。」

「ああ……わかった……。生きる。生きるから死ないでくれよ!」  
雄一の手がレイリアの頭から離れ、彼女の手を握つた。しかしその手にはもう、体温が感じられなかつた。

「レイリアの手……温かいよ……。こうして死ねるだけでも幸せ者だ……。」

レイリアは彼の手をぎゅっと握り締めて胸に抱いた。

「死ぬなと言つていいだろ……。離れたくないよ……。」

「実はね……もう目が見えないんだ。だんだんと耳も遠くなってる。着実と終わりがきてるってわかるんだ……。だから最期に……愛してるよ。」

掠れ切つた彼の声。レイリアの耳には小さくしか届かない。

「諦めるなー生きる希望を持つてくれー何とか生き延びて……私と逃げよう!」

何とか生き延びて。出来るものならそうしたかった。しかしそれが既に不可能なのはレイリアにも十分にわかつていた。

「レイリア……？まだ……近くにいるかい……？」

「な、何を言つているー!」うして手を握つてゐるじゃないか!」

レイリアは更に力を込めて雄二の手を抱きしめた。しかしもう彼にはそれを感じる力すら残つていなかつた。彼の目から涙が零れ落ちる。

「レイリア……いやだ……。一人にしないで……くれよ……。ずっと一緒にいたいのに……。何処に……いるんだよ……。」

レイリアは何も言わなかつた。ただただ、彼に自分の温もりが伝わればと力一杯に彼の手を抱きしめた。

「死にたくないよ。」

そう言つと彼は嗚咽して喉を鳴らしながら血を吐いて、息絶えた。

レイリアは絶対に涙を流そとはしなかつた。

愛した男への、最低限の礼儀。

もう動かない彼に、最期にそつと、静かに唇を重ねた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4018m/>

---

悲劇。天使の場合と悪魔の場合。

2010年10月9日00時48分発行